

## 学校における身近な医薬品の教育に関する研究

松本 禎明・坂口 裕美

九州女子短期大学専攻科子ども健康学専攻、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1（〒807-8586）

（2014年11月13日受付、2014年12月18日受理）

### 要 旨

現在、ドラッグストアやコンビニエンスストア、インターネットなどで簡単に一般用医薬品を手に入れることができ、また、世界保健機関（WHO）が定義している「自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不満は自分で手当てすること」すなわちセルフメディケーションの意識の高まりによって、一般用医薬品のみならず、特定保健用食品にも関心が高まっている。このことから、医薬品が非常に身近になり、小学生でも容易に使用できるという実態がある。そこで本研究では、改正薬事法が平成21年6月から施行されたことを受け、平成24年度から薬教育が義務づけられたことで、薬教育受講の有無による学年別影響を意識して、高校生に対して身近な医薬品に関する調査を実施し、今後の中学校のみならず高等学校での薬教育の在り方についてアンケート調査により調べることにした。

その結果、医療用医薬品と一般用医薬品を同一視している生徒が多いことや風邪薬、抗炎症薬、酔い止めの薬、点鼻薬及び睡眠改善薬などの「身近な医薬品」に共通して含まれていることが多い抗ヒスタミン薬の存在を知っている生徒はわずかであった。医薬品の作用、使用方法の理解が不十分な生徒が多く、「身近な医薬品」を重複使用したときの副作用、なかでも有害作用についての理解ができていないことが分かった。薬教育は、中学生、小学生高学年から始めるのが良いと回答していた生徒が全体で75%もいたことから、早い段階での薬教育の必要性を感じている生徒が多いことが分かった。

また、生徒から薬教育への養護教諭に対する期待度が非常に高く、養護教諭は薬教育の中心的役割を担うべきであるといえる。養護教諭のパートナーとしては、体育教諭、ついで担任教諭と回答した割合が多かった。これは、専門性を有する専門家よりも中学校や高等学校の保健の授業で体育教諭が授業をすることが多いからであると考えられる。このことから、養護教諭が中心となり学校内の教諭さらには保護者への教育訓練を日頃から行い、外部の専門家からの協力を得て専門性を高める必要があると考えられる。

### I. 緒 言

現在、ドラッグストアやコンビニエンスストア、インターネットなどで簡単に一般用医薬品<sup>1)</sup>を手に入れることができる。

また、世界保健機関（WHO）が定義している「自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身

体の不満は自分で手当てすること」<sup>2)</sup>すなわちセルフメディケーションの意識の高まりによって、一般用医薬品のみならず、特定保健用食品にも関心が高まっている。

日本学校保健学会による「医薬品に関する教育」の授業を受けた小中学生にしたアンケート調査で、小学生が約20%強、中学生では約10%強が学校に医薬品を持参していた。自分の判断で医薬品を服用していると回答したのは、小学生で約15%、中学生では約30%であった<sup>3)</sup>。この結果から、医薬品は非常に身近なものであり、小学生でも容易に使用できるという実態がある。

改正薬事法が平成21年6月から施行された<sup>4)</sup>ことを受けて、中学校学習指導要領が改正され平成24年度から中学3年生に対して薬教育が義務づけられた<sup>5)</sup>。そこで本研究では、高校生に対して、この薬教育受講の有無による学年別影響を意識して、身近な医薬品に関する調査を実施し、今後の中学校のみならず高等学校での薬教育の在り方の課題と展望について検討することにした。

## II. 調査方法

### 1. 調査対象

本調査は、鹿児島県のA高等学校（生徒数約1,200人）の各学年同じコースの1クラスを任意に選択し、1年生28人、2年生29人及び3年生32人、合計89人を対象として、無記名・選択式（一部記入式）の書面調査（アンケート用紙記入方式）を実施した。調査用質問用紙の配布は、事前に連絡した後直接訪問して各教諭に配布した。記入後、教諭が調査用質問用紙を回収し、手渡ししてもらう形式をとった。調査は平成26年5月から6月にかけて実施した。なお、調査は、自由意思による回答と個人情報保護を含め倫理的配慮を最大限に行った（本学倫理審査による許可済）。

### 2. 調査用質問内容

表1. アンケート項目

1. 医薬品を一人で買ったことがありますか。
- 1-2. 1で「はい」と答えた方は、買うときに医薬品の使用法、医薬品に含まれている成分などを確認しましたか。
- 1-3. 1で「はい」と答えた方は、どのような医薬品を買いましたか。当てはまるものに○をつけてください（複数選択可能）。
2. 友人や知人に医薬品をもらって、服用したことがありますか。
- 2-2. 2で「はい」と答えた方は、もらうときどのような医薬品で、どのような成分が含まれているか確認しましたか。
3. 医薬品には医療用薬品と一般用薬品がありますが、違いが分かりますか。
4. 医療用医薬品の処方箋をもらったとき、きちんと説明をしてくれましたか。
5. 医療用医薬品をもらったとき、作用と服用の仕方を理解して服用していますか。
6. 医薬品を服用して眠くなったことはありますか。

7. 1日に2種類以上の一般用医薬品(市販の薬)を服用したことはありますか。  
 7-2. 7で「はい」と答えた方は、何の医薬品を服用しましたか。差支えなければご記入ください。  
 8. 医薬品を服用して困ったことはありますか。  
 8-2. 8で「はい」と答えた方は、どのようなときに困ったのか、どのように困ったかご記入ください。  
 9. 医薬品を服用して良かったと思うことはありますか。  
 9-2. 9で「はい」と答えた方は、どのようなときに良かったと思ったのかご記入ください。  
 10. 夜寝れないときに飲む睡眠改善薬という薬があることを知っていますか。  
 10-2. 10で「はい」と答えた方は、睡眠改善薬を服用したことがありますか。  
 11. 風邪薬と乗り物酔い止め薬を同時に服用しても良いと思いますか。  
 12. 頭痛薬と睡眠改善薬を同時に服用しても良いと思いますか。  
 13. 抗ヒスタミン薬という言葉聞いたことはありますか。  
 14. 風邪薬と点鼻薬と同じ成分が入っているものがあるということを知っていましたか。  
 15. 平成24年度から、中学3年生は薬教育が義務化されましたが知っていましたか。  
 16. 薬教育は誰が中心となってすべきだと思いますか。  
 17. 養護教諭が中心となって薬教育をする場合、パートナーは誰が良いと思いますか。  
 18. 薬教育はどの学年から始めるのが良いと思いますか。

### III. 調査結果

調査用質問用紙の回収率は、89人中89人（100％）であった。なお、表中の回答割合（％）については小数点以下を四捨五入して整数で表示していること、また、複数選択箇所があることから回答割合の内訳を合計した数値は必ずしも100％にはならない。複数選択としていない箇所複数選択があった場合は集計から除外した。

表2. 調査結果 (特記している所以外はn=89)

	回答数	回答割合 (%)
質問1. 医薬品を1人で買ったことがありますか。		
・はい	38	43
・いいえ	51	57
質問1-2. 1で「はい」と答えた方は、買うときに医薬品の使用法、医薬品に含まれている成分などを確認しましたか (n=38)。		
・はい	25	66
・いいえ	13	34
質問1-3. 1で「はい」と答えた方は、どのような医薬品を買いましたか。当てはまるものに○をつけてください (複数選択可能) (n=38)。		
・風邪薬	20	53
・頭痛薬	19	50
・点鼻薬	7	18
・点眼薬	15	39
・その他【塗り薬】【痛みどめ】【口内炎】【忘れた】【記入なし】	5	13
・無回答	1	3
質問2. 友人や知人に医薬品をもらって、服用したことがありますか。		
・はい	38	43
・いいえ	51	57
質問2-2. 2で「はい」と答えた方は、もらうときどのような医薬品で、どのような成分が含まれているか確認しましたか (n=38)。		
・はい	18	47
・いいえ	20	53
質問3. 医薬品には医療用医薬品と一般用医薬品がありますが、違いが分かりますか。		
・はい	27	30
・いいえ	62	70

質問4. 医療用医薬品の処方箋をもらったとき、きちんと説明をしてくれましたか。		
・はい	87	98
・いいえ	2	2
質問5. 医療用医薬品をもらったとき、作用と服用の仕方を理解して服用していますか。		
・はい	66	74
・いいえ	23	26
質問6. 医薬品を服用して眠くなったことはありますか。		
・はい	56	63
・いいえ	29	33
・無回答	4	4
質問7. 1日に2種類以上の一般用医薬品（市販の薬）を服用したことはありますか		
・はい	14	16
・いいえ	71	80
・無回答	4	4
質問7-2. 7で「はい」と答えた方は、何の医薬品を服用しましたか。差支えなければご記入ください（自由記述）（n=14）。		
・頭痛	4	29
・鼻炎の薬（鼻水を止める薬）	3	21
・点眼薬	2	14
・胃腸薬	2	14
・のどの痛み止めの薬	1	7
・せき止めの薬	1	7
・下痢止めの薬	1	7
・風邪薬	1	7
・アトピーの薬	1	7
・覚えていない	1	7
・無回答	4	29
質問8. 医薬品を服用して困ったことはありますか。		
・はい	12	13
・いいえ	73	82
・無回答	4	4
質問8-2. 8で「はい」と答えた方は、どのようなときに困ったのか、どのように困ったかご記入ください（自由記述）（n=12）。		
・アレルギーが出た	3	25
・眠くなる	2	17
・手がけいれんした	1	8
・体がだるくなった	1	8
・全身にぶつぶつができやくくなった	1	8
・扁桃腺が腫れた	1	8
・いつも服用している薬と一緒に飲んで気分が悪くなった	1	8
・のどが渇く	1	8
・記入なし	1	8
質問9. 医薬品を服用して良かったと思うことはありますか。		
・はい	58	65
・いいえ	25	28
・無回答	6	7
質問9-2. 9で「はい」と答えた方は、どのようなときに良かったと思ったのかご記入ください（自由記述）（n=58）。		
・治った	15	26
・痛みがなくなった（やわらいだ）	13	22
・体が楽になる（体調が良くなる）	13	22
・効果がでた	5	9
・早くよくなる	5	9
・授業に集中できる	1	2
・頭痛、生理痛	1	2
・無回答	5	9

質問10. 夜眠れないときに飲む睡眠改善薬という薬があることを知っていますか。		
・はい	42	47
・いいえ	43	48
・無回答	4	4
質問10-2. 10で「はい」と答えた方は、睡眠改善薬を服用したことがありますか (n=42)。		
・はい	4	10
・いいえ	38	90
質問11. 風邪薬と乗り物酔い止め薬を同時に服用しても良いと思いますか。		
・はい	30	34
・いいえ	54	61
・無回答	5	6
質問12. 頭痛薬と睡眠改善薬を同時に服用しても良いと思いますか。		
・はい	21	24
・いいえ	64	72
・無回答	4	4
質問13. 抗ヒスタミン薬という言葉聞いたことはありますか。		
・はい	6	7
・いいえ	79	89
・無回答	4	4
質問14. 風邪薬と点鼻薬と同じ成分が入っているものがあるということを知っていましたか。		
・はい	9	10
・いいえ	76	85
・無回答	4	4
質問15. 平成24年度から、中学3年生は薬教育が義務化されましたが知っていましたか。		
・はい	5	6
・いいえ	84	94
質問16. 薬教育は誰が中心となってすべきだと思いますか(n=87)。		
・校長先生	4	5
・教頭先生	0	0
・担任の先生	3	3
・養護教諭	62	71
・体育教諭	10	11
・その他【薬剤師】	2	2
【全員】	2	2
【大人】	1	1
【専門の人】	1	1
【記入なし】	1	1
・無回答	1	1
質問17. 養護教諭が中心となって薬教育をする場合、パートナーは誰が良いと思いますか (n=88)。		
・校長先生	6	7
・教頭先生	1	1
・担任の先生	24	27
・体育教諭	52	59
・その他【薬剤師】	1	1
【専門の人】	1	1
【教員】	1	1
【記入なし】	1	1
・無回答	1	1
質問18. 薬教育はどの学年から始めるのが良いと思いますか (n=88)。		
・小学生低学年	7	8
・小学生中学年	8	9
・小学生高学年	22	25
・中学生	44	50
・高校生	3	3
・専門学生, 大学生	2	2
・無回答	2	2

## IV. 考 察

### 1. 医薬品を1人で買ったことがあるかについて

今回調査を行った中で、全体の43%が1人で医薬品を買ったことがあり、そのうち66%の生徒は買うときに医薬品の使用方法、医薬品に含まれている成分などを確認しているという結果になった。買った医薬品の種類で「風邪薬」又は「頭痛薬」と回答したのは約半数以上を占めていた。また、中学生を対象とした医薬品適正使用に関する意識調査で中学2年生103人に「自分でくすりを買うことができるのは、どれだと思いますか」という問いに対して、「ドラッグストア（68%）」、「薬局（61.2%）」が最も多く、ついで「医療機関（42.7%）」「コンビニエンスストア（35%）」という結果<sup>6)</sup>から医薬品を容易に入手できるという認識が高いといえる。

### 2. 人からもらった医薬品の服用について

「友人や知人に医薬品をもらって服用したことがありますか」という問いに対して、「服用したことがある（43%）」という結果になった。また、「医薬品をもらうときどのような医薬品で、どのような成分が含まれているか確認しましたか」という問いに対して「はい（47%）」という結果になった。日本学校保健学会による「医薬品に関する教育」の授業を受けた小中学生にしたアンケート調査で、自分の判断で医薬品を服用していると回答したのは小学生で約15%、中学生では約30%<sup>3)</sup>で、今回のアンケート調査では、全体の約50%の生徒が、友人や知人から成分や作用を確認しないまま入手し、自分の判断で服用していることが分かった。また、全国の20～69歳の男女600人のうち60%以上の人が、自分が処方された医療用医薬品を家族を含む他人にあげた経験がある<sup>7)</sup>。このことから、年齢が上がるにつれて自分の判断で医薬品を服用する傾向があるのではないかと考えられる。

### 3. 医療用医薬品と一般用医薬品の違いの認知度について

医療用医薬品と一般用医薬品の違いの認知度について、「医薬品には医療用医薬品と一般用医薬品がありますが、違いが分かりますか」という問いに対して「いいえ」と回答した生徒は、1年生、2年生及び3年生でそれぞれ75%、62%及び72%という結果になった（図1）。高等学校学習指導要領<sup>8)</sup>では解説で第2章に「医薬品には、医療用医薬品と一般用医薬品があること、承認制度により有効性や安全性が審査されていること及び販売に規制があることを理解できるようにする」<sup>9)</sup>と記されているが、各学年の割合にあまり違いがなく、全体で70%もの生徒が違いを認識していないという結果になった。このことから、授業の理解ができておらず、医療用医薬品と一般用医薬品を同一視している可能性があると考えられる。

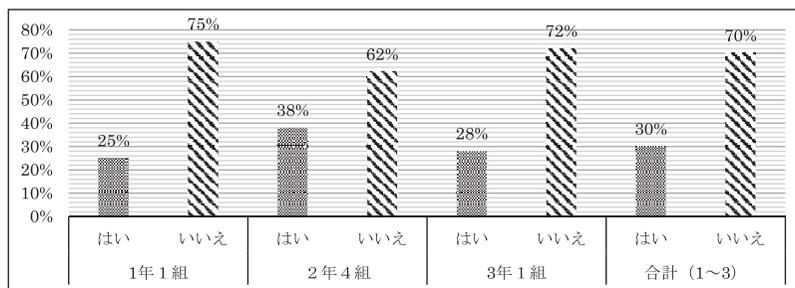


図1 医療用薬品と一般用薬品の違いの認知度について

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

#### 4. 医療用医薬品の処方箋をもらうとき説明を受けるかについて

「医療用医薬品の処方箋をもらったとき、きちんと説明をしてくれましたか」という問いに対して、ほとんどの生徒が説明を受けたという認識があることが分かった(図2)。

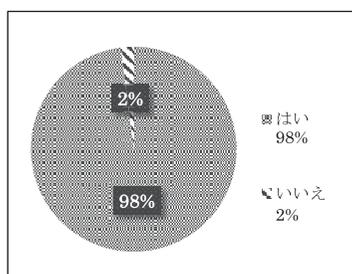


図2 医療用医薬品の処方箋をもらうとき説明を受けるかについて

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

### 5. 医療用医薬品をもらったとき、作用と服用の仕方を理解しているかについて

質問4の「医療用医薬品の処方箋をもらったとき、きちんと説明をしてくれましたか」という問いに対して、ほとんどの生徒が「はい」と答えていた(図2)が、質問5の「医療用医薬品をもらったとき、作用と服用の仕方を理解して服用していますか」という問いに対しては、「いいえ」と回答している生徒が約25%にも及んだ(図3)。このことから、医療用医薬品の処方箋の説明を受けたという自覚はあるものの約25%もの生徒は、作用や使用方法の理解までには十分に至っていないことが分かった。

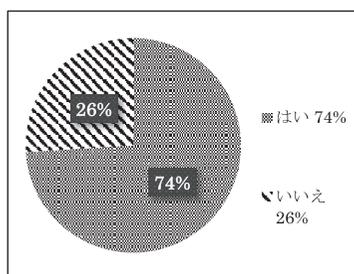


図3 医療用医薬品をもらったとき、作用と服用の仕方を理解しているかについて

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

### 6. 医薬品を服用して眠気を感じたことがあるかについて

「医薬品を服用して眠くなったことはありますか」という問いに対して、「はい」と回答した生徒は、各学年差はなく、60%程度であった(図4)。このことから、医薬品の使用により眠気を体験した生徒が相当数いることが分かった。

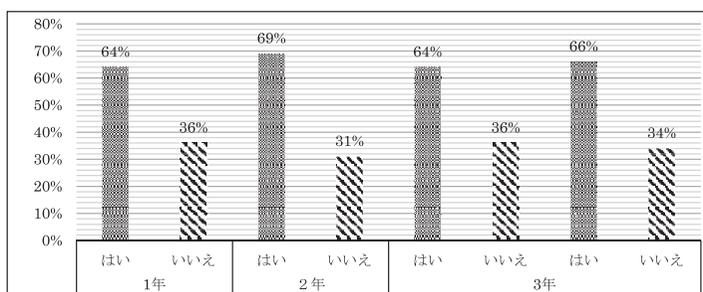


図4 医薬品を服用して眠気を感じたことがあるかについて

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

### 7. 1日に複数の一般用医薬品(市販の薬)の服用について

「1日に2種類以上の一般用医薬品(市販の薬)を服用したことはありますか」という問いに対して、「はい」と回答した生徒は16%(無記名4人を抜いた)(n=85)に留まった(図5)。具体的に使用した一般用医薬品は、「頭痛薬」、「鼻炎の薬(鼻水を止める薬)」、「点眼薬」、「胃腸薬」、「のどの痛み止めの薬」、「せき止めの薬」、「下痢止めの薬」、「風邪薬」、「アトピーの薬」及び「覚えていない」と多岐に及んでいた(図6)。このことから、安易な医薬品の併用は有害作用の発現を懸念されることから注意が必要と考えられる。

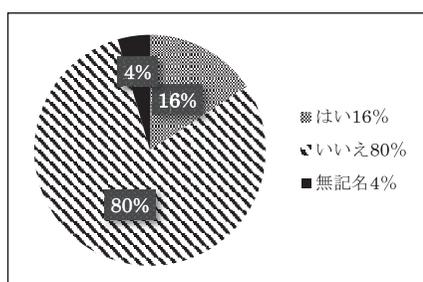


図5 1日に複数の一般用医薬品(市販の薬)の服用について

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

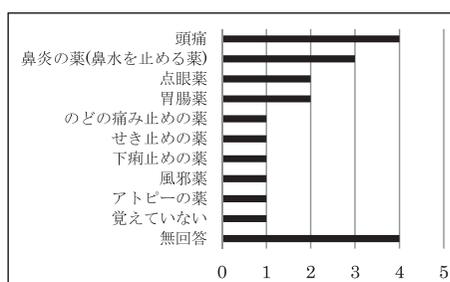


図6 質問7で「はい」と答えた生徒が服用した医薬品

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

### 8. 医薬品を服用して困ったことについて

「医薬品を服用して困ったことはありますか」という問いに対して、「はい」と回答した生徒は13%(無記名4人を抜いた)(n=85)に留まった。「はい」と回答した生徒に、「どのようなときに、どのように困ったか」と問うと、「眠くなる」と答えた割合はわずか16%であった。また、質問6の「薬を服用して眠くなったことはありますか」(図4)という問いに対しては、全体で約65%の生徒が眠くなったことがあると回答しているように、世の中で使用されている鎮痛薬、風邪薬の多くは服用すると眠くなる。しかし、薬を服用して眠くなるのが困と感じている生徒がわずか16%であることから、副作用の中でも有害な作用としての認識がされていないものと考えられる。

### 9. 医薬品を服用して良かったことについて

「医薬品を服用して良かったと思うことはありますか」という問いに対して、「はい(65%)」という結果になった。「はい」と答えた生徒に、「どのようなときに良かったと思ったか」と問うと、「治った(とき)」、「痛みがなくなった(やわらいだ)」、「体が

楽になる（体調が良くなる）」を合わせると70%近くにも及んだ。質問8の「医薬品を服用して困ったことはありますか」という問いの割合と比較すると、医薬品に対して良い印象を持っている生徒の割合の方が高いことがいえる。このことから、体の調子を回復させるために医薬品への期待度が高いことが分かった。

#### 10. 睡眠改善薬について

「夜眠れないときに飲む睡眠改善薬という薬があることを知っていますか」という問いに対して、知っていると回答した生徒は47%であった。そのうち使用したことがある生徒は10%に留まったが、睡眠改善薬への関心はそれなりにあるものと考えられる。

#### 11. 風邪薬と乗り物酔い止め薬の併用について

「風邪薬と乗り物酔い止め薬を同時に服用しても良いと思いますか」という問いに対して、1年生「はい（21%）」、2年生「はい（52%）」、3年生「はい（33%）」（無回答5人を抜いた）（n=27）となり、全体で「はい（36%）」（無回答5人を抜いた）（n=84）という結果になった（図7）。多くの風邪薬には、眠気をもたらす抗ヒスタミン薬が含まれているが、乗り物酔い止め薬の主成分は抗ヒスタミン薬そのものである。これらを併用することは、意識レベルを低下させるなどの危険性を増大させる可能性がある。このことから、両医薬品の併用はすべきではなく、十分な薬教育の実施が求められる。

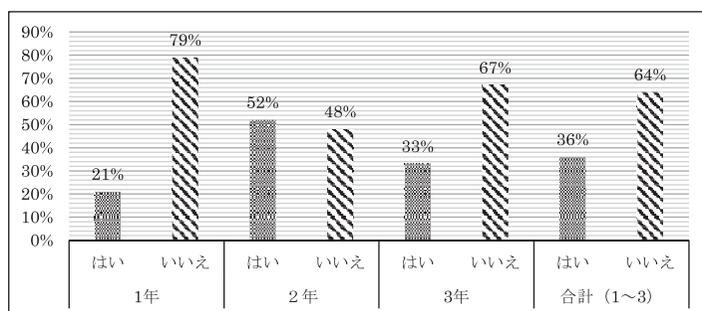


図7 風邪薬と乗り物酔い止め薬の併用について

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=27)

#### 12. 頭痛薬と睡眠改善薬の併用について

「頭痛薬と睡眠改善薬を同時に服用しても良いと思いますか」という問いに対して、1年生「はい（14%）」、2年生「はい（38%）」、3年生「はい（21%）」（無回答4人を抜いた）（n=28）となり、全体で「はい（25%）」（無回答4人を抜いた）（n=85）という結果になった（図8）。質問11の「風邪薬と乗り物酔い止め薬を同時に服用しても良いと思いま

すか」(図7)と比較すると、各学年ともに質問11より約10%、頭痛薬と睡眠改善薬を同時に服用してはいけないと回答している生徒の割合の方が高い。しかしながら実際は、頭痛薬と睡眠改善薬の併用より風邪薬と乗り物酔い止め薬の併用による抗ヒスタミン薬作用の増強の方が、リスクがある。このことから、それぞれの医薬品の作用の理解までには至っていないと考えられる。

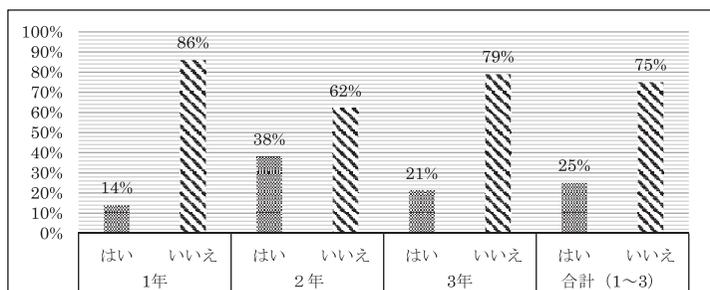


図8 頭痛薬と睡眠改善薬の併用について

(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

### 13. 抗ヒスタミン薬の認知度について

抗ヒスタミン薬は、鼻水止めや痒み止めなどの作用があり、鼻風邪やアレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹などのアレルギー疾患の治療でよく用いられ、一般的な副作用として口の渇き、眠気、めまい・ふらつき、だるさ、下痢などがある。「抗ヒスタミン薬という言葉聞いたことはありますか」という問いに対して、全体の約90%の生徒が聞いたことがないという結果になった(図9)が、質問1の1人で医薬品を買ったことがあると答えたうちの66%の生徒が、質問1-2の1人で薬を買うときに医薬品の使用方法、薬に含まれている成分などを確認していると回答していたが、確認した気だけで理解して服用していないことが分かった。ドラッグストアや薬局、コンビニエンスストア等で医薬品に触れる機会が多くなっているため、日常生活で医薬品などが身近になり、医薬品を服用するということに対して抵抗が少ないのではないかと考えられる。副作用で眠気等を伴う抗ヒスタミン薬は、夜使用するときは支障をきたさないかもしれないが、日中の諸活動の内容によっては重大な事故や支障をきたす恐れがある。新中学校学習指導要領の第2第7節保健体育科・保健分野の薬教育<sup>5)10)</sup>では、抗ヒスタミン薬についてまではふれていないが、抗ヒスタミン薬は世の中で広く使われているため早い段階から抗ヒスタミン薬について正しい知識をもたせる必要があると考えられる。

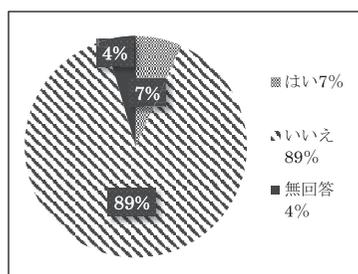


図9 抗ヒスタミン薬の認知度について  
(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

#### 14. 風邪薬と点鼻薬に同じ成分が入っているものがあるということの認知度について

「風邪薬と点鼻薬に同じ成分が入っているものがあるということを知っていましたか」という問いに対して、全体の85%の生徒が知らないと回答している（図10）。風邪薬には鼻水を抑えるために抗ヒスタミン薬が配合されていて、鼻炎に対して必要以上に抗ヒスタミン薬を使用してしまうことにつながる。このことから、身近に使われている抗ヒスタミン薬のような医薬品が用途の違いがあっても共通に使われているという認識が低いことが分かった。

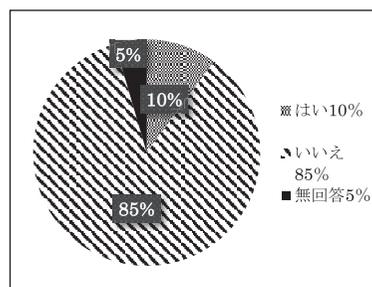


図10 風邪薬と点鼻薬に同じ成分が入っているものがあるということの認知度について  
(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

#### 15. 薬教育の認知度について

中学校学習指導要領が改正され、平成24年度から薬教育が事実上義務づけられた。「平成24年度から、中学3年生は薬教育が義務化されましたが知っていましたか」という問いに対して、全体の94%が知らないと回答している（図11）。1年生、2年生は中学3年生のときに、薬教育を受けているにもかかわらず1年生、2年生合わせて全体で6%しか知らないという結果になった。このことから、ほとんどの生徒が薬教育に対して認識が低いことが分かった。

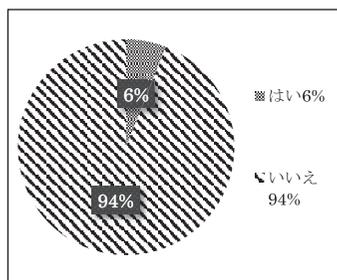


図11 薬教育の認知度について  
(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=32)

#### 16. 薬教育は誰が中心となつてすべきかについて

「薬教育は誰が中心となつてすべきだと思いますか」という問いに対して、各学年ともに「養護教諭」と回答した生徒の割合が最も高い結果になった（図12）。また、小学校教諭へのアンケート調査から、薬教育において養護教諭に率先して取り組んでほしいという現場の声が多く、養護教諭の専門性の期待が高い<sup>11)</sup>ことが分かった。特に、学校の中で期待度の高い養護教諭については薬への専門性をさらに深めていく必要があり<sup>12)</sup>、本研究でも同様な結果となった。

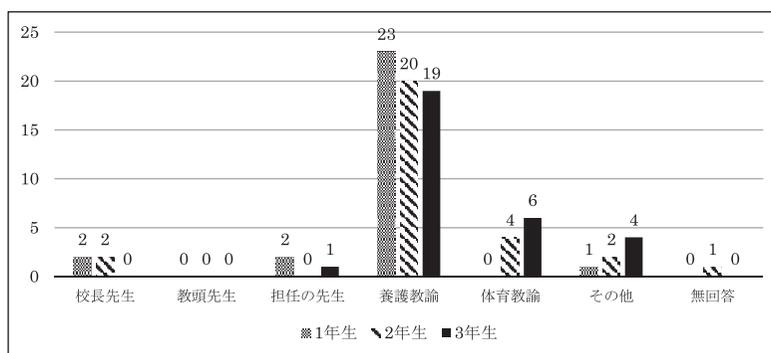


図12 薬教育は誰が中心となつてすべきだと思いますか  
(1年生n=28、2年生n=29、3年生n=30)

#### 17. 養護教諭が中心となつて薬教育をする場合のパートナーについて

「養護教諭が中心となつて薬教育をする場合、パートナーは誰が良いと思いますか」という問いに対して、各学年ともに「体育教諭」と回答した生徒の割合が高く、ついで「担任の先生」という結果になった（図13）。その他には、「薬剤師」、「専門の人」など1票ずつ回答されていたが、専門性を有する専門家よりも身近な体育教諭、担任の先生の回答割合が

高かったのは中学校や高等学校で体育教諭が、保健の授業をすることが多いことから養護教諭のパートナーとしてふさわしいと回答したのではないかと考えられる。このことから、養護教諭だけではなく、体育教諭をはじめ学校内の全ての教諭が医薬品に関する正しい知識を身に付けて、薬への専門性を深めていく必要があるといえる。

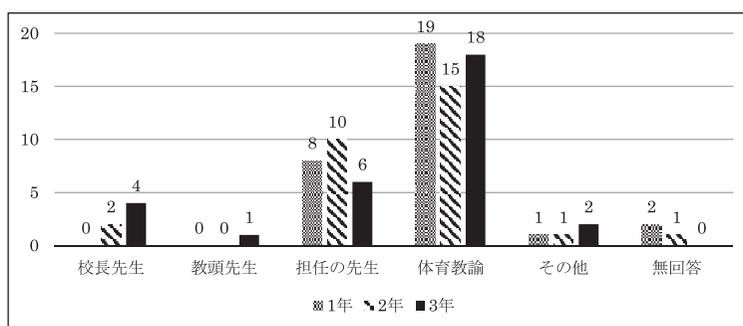


図13 養護教諭が中心となって薬教育をする場合のパートナーについて  
(1年生n=28、2年生n=28、3年生n=32)

#### 18. 薬教育を始める学年について

「薬教育はどの学年から始めるのが良いと思いますか」という問いに対して、各学年ともに「中学生」が最も多く、全体では「中学生」が半数を占め、さらに、「小学生高学年」を含めると75%という高い割合を示した。これに対して、「高校生」と回答した生徒はほとんどいなかった。さらに、「高校生」に「専門学生、大学生」を含めてもわずか5%という結果になった(図14)。また、小学生においても学校に医薬品を持参し、自分の判断で医薬品を服用することがある<sup>3)</sup>ことにより、早い段階から薬教育をする必要があるのではないかと考えられる。

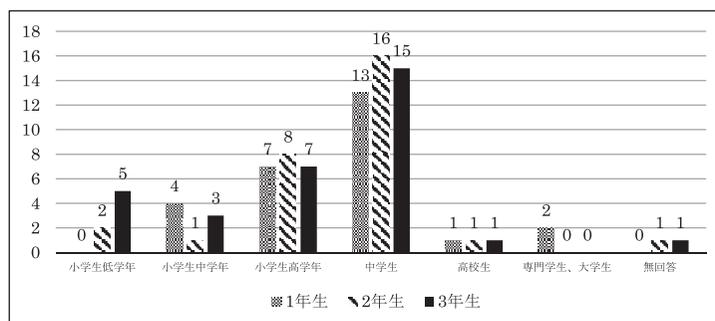


図14 薬教育を始める学年について  
(1年生n=27、2年生n=29、3年生n=32)

## V. 総括及び結論

今回の高等学校の生徒への「身近な医薬品」に関する調査結果から、学校教育における薬教育には次の現状と課題があることが分かった。

1. 薬教育は、全体で75%もの生徒が中学生と小学生高学年から始めるのが良いと回答していたことから、早い段階からの薬教育の必要性を感じていることが分かった。また、医療用医薬品と一般用医薬品を同一視している生徒が多いことや医薬品の作用、使用方法の理解が不十分な生徒が多かった。
2. 「身近な医薬品」、すなわち風邪薬、抗炎症薬、酔い止めの薬、点鼻薬及び睡眠改善薬に共通して含まれていることが多い抗ヒスタミン薬の存在を知っていた生徒はわずか7%であり、表面上用途の異なる「身近な医薬品」を重複使用したときの、副作用のなかでも有害作用について理解できていないことが分かった。
3. 生徒からの薬教育への養護教諭に対する期待度は最も高かったが、それはその専門性を高く評価している現れであると考えられる。

以上のことから、子どもたちへの薬教育は、薬の化学的根拠に基づく使用や健康被害防止のために早期段階からの教育が必要で、その中心的役割は養護教諭が担うべきである。しかしながら、養護教諭の学校への配置は原則1人、多い所でも2人に留まっている。このことから、養護教諭自身が外部の専門家からの協力を得て、専門性を高めながら学校内の教諭さらには保護者への教育訓練を踏まえるなど、日頃より恒常的で地道な教育体制作り、すなわちチーム教育が、より効果的な薬教育を子ども達へ提供できることに繋がるものと考えられる。

## VI. 謝 辞

本研究を進めるにあたり、調査に快くご協力頂いた皆様に心から感謝の意を表す。

## VII. 参考文献

- 1) 伊藤暁子、医薬品のインターネット販売をめぐる動向、調査と情報、国立国会図書館、727 (2011) 1~12
- 2) Guidelines for the Regulatory Assessment of Medicinal Products for Use in Self-Medication, WHO Geneva, (2000)
- 3) 河野有、小林英夫、小田原照男、永田浩子、玉田隆司、山田大輔、竹内節子、嶋本陽子、児玉典子、松田偉太郎、佐藤実、米澤晴子、安井舞、小中学生の医薬品や健康に関する知識の実態と「医薬品に関する教育」の効果に関するアンケート調査結果について、第57回日本学校保健学会、口頭発表抄録及び発表内容、(2010)

- 4) 有澤賢二、平成21年度改正薬事法と薬局の取り巻く環境の変化：薬律の測定から薬事法改正にいたる背景と薬局の変遷について、薬史学雑誌、44 (2) (2009) 83
- 5) 文部科学省、第二章 第七節 保健体育、中学校学習指導要領、東山書房、(2008) 85～97
- 6) 山田純一、高柳理早、横山晴子、鈴木康弘、篠原智美、山田安彦、中学生を対象とした医薬品適正使用に関する意識調査と学校薬剤師による教育の効果、YAKUGAKU ZASSHI、132 (2) (2012) 215～224
- 7) 保田宗良、医薬品情報と医療消費者についての考察、日本消費経済学会、23 (2001) 163～170
- 8) 文部科学省、第二章 第六節 保健体育、高等学校学習指導要領、東山書房、(2008) 90～97
- 9) 文部科学省、第二章 第二節 保健、高等学校学習指導要領解説、保健体育編・体育編、東山書房、(2009) 111～121
- 10) 文部科学省、第二章 保健分野、中学校学習指導要領解説、保健体育編、東山書房、(2009) 148～163
- 11) 岩崎優花、小学校への薬育導入に係る小学校教諭の意識調査に関する研究、(2010)
- 12) 松本禎明、津室香奈、薬の適正使用教育に係る養護教諭養成課程の学生における意識調査に関する研究、九州女子大学紀要、48 (2) (2012) 171～188

## **Education of the familiar pharmaceutical products in the school**

Yoshiaki MATSUMOTO, Yumi SAKAGUCHI

Advanced course of Childhood Care and Education at

Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

### **Abstract**

In late years store and the Internet can obtain an OTC(over the counter) drug easily. In addition, by a surge of the consciousness of I "take responsibility for own health, and treating the slight physical dissatisfaction by oneself" namely the self-medication that the World Health Organization ( WHO ) defines, interest rises to a health food. Therefore we carried out an attitude survey about the knowledge of pharmaceutical products to students of the high school being conscious of influence of having attendance or not of the medicine education lecture at the junior high school.

As a result, as for students of the high school, overlap use problems of antihistamine used for the difference between OTC drug and ethical drug and a wide use feel the need of the education attendance by an early generation because there was not enough understanding.

As for the education, a school-nurse assumes a health and physical education teacher a partner and they regard cooperation as other teachers and should carry it out.

Key words : school, school-nurse, education, pharmaceutical products